



## < 『(株)北海道 Be-f@ctory』 鈴木さんのこだわり >

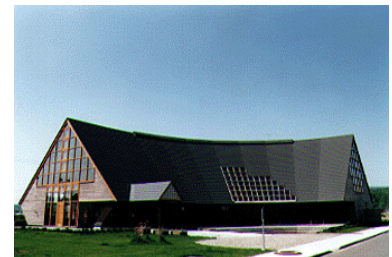
『道産材へのこだわり』第1回は、新しい住宅建設を行う『(株)北海道 Be-F@ctory』の鈴木さんにお聞きしました。

### 昔から道産材を使いたいという意識があった

鈴木さんが道産材にこだわるのは今回が初めてではない。道産材へのこだわりは、鈴木さんが設計した、旭川にある北海道立林産試験場に隣接する『木と暮らしの情報館』にさかのぼる。

『木と暮らしの情報館』は、北海道の企業で製作された優れた木製品（建材資材、クラフト等）とその情報、林産試験場で開発された成果等を道民に広く知っていただくために、1988年（昭和63年）に作られたもので、情報館自体がカラマツ大断面集成材のドリフトピン接合技術による画期的な工法で作られている。

鈴木さんは、『木と暮らしの情報館』の設計をきっかけとして、道庁の水産林務部（当時は林務部）の職員から北海道の木材産業の現状を知ることとなり、道産材の利用についての思いが強くなっていった。



木と暮らしの情報館

### 道産材を使うにあたって

しかし、道産材を使用したいといっても、残念ながら簡単に使用できるものではない。もっとも大きな問題として“価格差”の問題がある。つい最近まで道産材を使用した住宅と輸入材を使用した住宅は数十万円の価格差があった。

近年、ユーロ高等の影響で、道産材と輸入材の価格差が狭まってきた。まだ輸入材のほうが安い、木材価格にして1棟当たり10万円前後まで価格差が縮まり、施工の工夫で価格差を解消できる見込みが立ってきたという。

現在、鈴木さんが取り組んでいる Be-h@us では、部材の種類を減らし、工業製品化を進め、金物接合による施工工程の簡素化により、質を落とさずに価格を抑える工法が確立されており、道産材を使用することが可能となった。



Be-h@us モデルハウス

### 許容力の大きい人が住む住宅

普通、設計事務所はモデルハウスを作らない。もともと、自由設計、それぞれの住宅で全く異なる設計を売り物にしているだけに、モデルハウスを作る意味がないのである。しかし、Be-h@us ではモデルハウスを作った。

木はねじれ、まがり、縮む。工法で改善できる部分はあるものの、すべてが改善されるわけではない。

モデルハウス建築の目的は、木材はねじれ、まがり、縮むものだということ、そして、それでも強度には問題がなく、欠点を上回る快適な居住空間を提供できることを実感していただくためのものだという。そのため、あえて良い材だけを使わず、悪い材も隠さず使っているという。

すべての人が Be-h@us で建築しなくても良い。許容力のある人が建ててくれればよいと鈴木さんは言う。

## 道産材を使う上での工夫

Be-h@us の工法はこれまでの工法と全く異なる。基本は柱・梁と、構造を強くするための壁からなっているが、柱・梁は断面積で 3 種類しかなく、長さも 6m を基準としている。また、すべての梁は 1m ごとに接合金物を装着する穴があげられている。

この工法のために、各部材を効率的に生産することができ、かつ、完成品の形でストックすることができる。これまでの住宅は、柱や梁はほとんどすべての部材の大きさがことなり、ほぞ等の位置がそれぞれの部材で異なるため、各部材の細工が困難であったことに加え、設計図が完成してからでないといふ細工ができないという欠点があった。

また、施工現場でも効率的に建てることできるようになった。これまでの部材はすべて位置が決まっていたため、設計図に従って「いの一番」から建てていたが、Be-h@us では、部材の種類が少なく、同じ規格の部材であればどこに建てても良いため、どこからでも建てることが可能になった。

Be-h@us の工法は、(財)日本住宅・木材技術センターの木造住宅合理化システムに認定されている (12A48)。



Be-h@us モデルハウス

Be-h@us の床はワックスをほとんど塗っていない。思わず裸足で歩きたくなるような“暖かい”床だ。木材をふんだんに使い、木の柔らかさや温もりを感じることのできる家。木が好きな人にはぜひお勧めしたい住宅である。

●Be-h@us に木材を供給している企業

[〔協同組合オホーツクウッドピア〕](#)

[〔佐藤木材工業株式会社〕](#)

●Be-h@us に関する詳しい情報は

[〔北海道 Be-f@ctory〕](#)